Jul　2014　No. 39

大垣市金生山化石館

# 化石館だより

コラム

## 金生山の大理石

金生山は化石の宝庫であると同時に有名な大理石の産地でもあります。金生山では壁材として使用する色調の揃った大きな板材を得ることは難しいのですが、多様な色彩と模様に恵まれており、装飾用の建築資材や石細工の原料として大いに利用され、赤坂町は大正から昭和初期にかけて、全国一の大理石産業の街として栄えました。

金生山の大理石が多様な色彩と模様をもっているのは、山中に赤鉄鉱の鉱脈があり山全体に鉄分が多いこと（赤坂という地名も酸化鉄を含んだ赤色の粘土に由来します）、石灰岩体に幾本もの玄武岩脈が貫入しており様々な金属元素が供給されたこと、更に大量で多種類の化石が含まれていることなどが大きな要因と考えられます。石細工の業者は、この色彩豊かな大理石に「更紗」「鵬足」「紅縞」「紅雲」「孔雀」など、百種類にも及ぶ名前を付けて区別していました。

金生山の大理石は、建築資材としては階段、手摺、応接室の床、化粧室、マントルピースなどの装飾に用いられ、国会議事堂をはじめ東京や大阪、名古屋などの百貨店、駅、官庁、銀行、また宮家にも納入されています。大型の石細工では、京都北野天満宮に奉納された二体の牛（美濃黒石・本更紗石）、京都東寺の更紗石灯篭、揖斐郡横蔵寺のフズリナ化石入り灯篭、その他にも石臼、手洗い鉢などが作られました。また、小細工品としては、花瓶、皿、床置、硯、風鎮などが大量に生産されました。赤坂の大理石小細工は歴史が古く、1830 年代には谷鼎が雲根堂と名のり硯などを製作販売しています。谷鼎は「雲根志」を著した木内石亭と親交があり、谷が贈ったフズリナ入の硯は大いに喜ばれたということ

です。赤坂町の大理石産業は今も健在ですが、石材は外国からの輸入物に変わってしまいました。かつて土産物や贈答品として盛んに生産された石細工も、今では貴重品です。金生山化石館では、最後の石細工職人となった貝沼喜久男氏の作品をもとに、美しい金生山の大理石を展示・紹介しています。

日本の化石として最初に論文に記載されたのは、1874 年のギュンベルによる赤坂石灰岩のフズリナ（パラフズリナ・ジャポニカ）です。これはウイーンで開催された万国博覧会（1873 年）で「富士石」という工芸品に含まれていた化石から発見されました。「富士石」がどういうものであったか詳しい記録は残っていませんが、赤坂の小細工製品には富士山を模った盆石があります。これは、黒石の中に一部白いところのある石を探し、この白を生かして雪を頂いた富士山に仕立て上げたものです。ギュンベルが見た「富士石」もこのような盆石であったかもしれません。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆　　**お 知 ら せ**　　◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

## 化石の寄贈がありました

大垣市内の方から化石の寄贈がありました。三葉虫やアンモナイト、魚などの化石と黄銅鉱や砂漠のバラなどの鉱物を併せて２９点です。　今後、講座などに活用していこうと思います。

問い合わせ：　大垣市金生山化石館　　電話　（0584）71-0950　（ファックスも同じ）
Email　kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp